

ら日本に送還すると発表した。奥地で優秀の折り紙つきで来たのに今さらノルマを落とすようなことはできないと、グループで種々検討して、他のグループに劣らない成績を維持した。

帰還とその後

そうこうするうちに収容所長の発言の二カ月がきた。六月十五日の夕食になっても何の音さたもない。まだまされたのかと就寝していると、十二時ごろだと思ふ、幕舎に二、三人が入り「皆聞け、ダモイの発表をする」と大きな南大尉の声がした。幕舎は俄かに「ドヨメキ」が起こり、また静寂になった。だれもが聞き漏らすまいと、本当にそのときの状況は筆舌に表わすことができない。

私らのグループは全員ダモイと発表された。

二日ばかり二つの収容所を移動、演劇、民主教育のようなことを聞かされたが、心は既に故国にあり、モットモ、モットモの程度で平穩に帰国船第一大拓丸に乗船。船内は何もなく、昭和二十二年六月十八日に舞鶴に上陸した。

帰国後、十月に村役場に就職。二十六年に高尾家に養子に入り、退職後、畑に汗を流しながら、公民館、学校建築期成同盟会などの事務局を終え、現在寿会（老人クラブ）の事務局で日夜を過ごしている。

明暗十年の旅路

石川県 伊藤 鍊二郎

大学を出て、郷里石川県の土木部で技手として二十一年近く勤めていた私は、昭和十五年（一九四〇年）、満州国へ長期出向を命ぜられた。

当時、建国間もない満州国は国土広大、資源も豊潤ここに「王道楽土」を建設すべく、軍官民協力して理想の具現に情熱を傾けていた。私ども一行六十人は、政府の各部署に配置され、基礎講義を受けた後、実務に就くことになった。

私は交通部（日本の運輸、建設省に当たる）の技師として、いよいよ現地に向かった。振り出しは北満の

東安省で、アムール川（黒龍江）の支流ウスリー川を
はさんでソ連領と対峙する寒冷の地であった。折から、
『滿蒙開拓』の国策スローガンに応じて続々渡航して
来る開拓団員受け入れのための農地の選定や道路の開
設、一方、軍関係の施設や飛行場建設等々、計画と実
施に休む間もないほどであった。虎林、虎頭、宝清、
東安……みな懐かしい土地である。

次いで奉天省、黒河省と転々としたが、年に一、二
度、業務連絡で帰国する度、既に始まっていた大東亜
戦争の形勢は樂觀を許されず、昭和十九年には敗色も
濃くなって、富山、福井も空襲で焼かれ、次はわが金
沢市の番だと思つと、ついに決心して自宅を処分、ず
つと留守居してくれていた妻子を同伴して満州に帰任
したが、まさか金沢だけが最後まで火難を免れようと
は思いも及ばなかった。

昭和二十年五月、四十三歳の私にもとうとう召集令
状がきた。「あなたは満州国の高官だからこれを」と、
星一つの二等兵に軍刀を持たされたが、刀の下緒に赤
い裏がついていたから（佐官が着用するもの）、少尉

や大尉の将校連から敬礼される始末、当方は何が何だ
か大あわてであつた。

錦州の八〇四部隊に入隊した後、錦県から興安南省
の通遼に移動し、道路補修、飛行場設置等に従事した
が、ここで敗戦を迎えた。

ソ連領に送られるまで、旧日本軍の衣服、糧秣、燃
料などの貨車積みに明け暮れたが、洗いざらいソ連に
持つていかれた。

夜半までの使役は、寒気と空腹に悩まされ、運んで
いた麻袋を夢中で破つて手づかみで中の粉を頬張つた
ら、珍しや白ゴマであつたことを覚えてゐる。

貨車積みが済んだら「ウラジオからトウキョウ！」
と言うソ連将校の声に歓喜、五〇トン積みの有蓋貨車
に四十二人ずつ三段の棚に詰め込まれて出発したのが
十月八日。それから四十余日、行けども行けども港に
は着かず、十二月初め下車した所が中央アジア、ウズ
ベク共和国のベグワード（現在ベガバード）で、四周
峨々たる高山に囲まれたバミール高原の麓、フェルガ
ナ大盆地の一隅であつた。

フェルガナは、古く「大宛」と呼ばれ、漢の武帝が東から遠征、また西からはアレキサンダー大王が攻めたことがある東西交通の要地だが、トルコ系の諸族が半地下住居に住んでいる。砂漠、ステップの荒地が大半だったが、盆地を貫くシル川の水を利用して運河を通し、ベグワードに発電所を建設する大目的のために一万人余の日本人の労力が投入されたのである。

水路の掘削作業には泣かされた。現場監督は我々より古参のドイツ兵で、怒鳴り散らすわ、暴力を振るうわで、私も撲られて片耳が聞こえなくなってしまった。高原から吹き下ろす寒風の厳しさは想像以上で、一メートル以上も結氷した土を掘り起こすのに精魂尽き果て、夜半の寒さは、敷布団の藁を抜いて足に巻き付け、靴のまま寝る有様であった。

水路に渡された仮橋を渡って作業に行くのだが、絶望の果て、欄干から身を踊らせて濁流に身を投げる日本人が日に二人、三人と出てきた。金網を張り巡らして身投げ防止を図ったが、それでも網をかけ上って飛び込む者がいた。私自身、今日こそは自分もと何度決

心したとか。その都度、満州に残してきた妻や二児が目前に浮かんで、涙ながらに耐えるしかなかった。

満州国の高官で国境周辺など歩き回っていた前歴がいつしか洩れ、タシケントの戦犯裁判で十年の禁錮刑に処せられるというおまけまでついたが、幸か不幸か、マリリアに罹ったほか、水路作業の重労働による腰椎圧迫症が重くなり、刑半ばでナホトカの病院に送られ、病院船高砂丸で帰国。担架に横たわったまま舞鶴国立病院、更に故郷の山代温泉分院に送られて、ベグワード出発以来三カ月ぶりで金沢に帰着したのが昭和二十五年九月。奉天にいた妻は、一児は亡くしたが、二十二年に帰国しており、再会を喜び合ったことは言うまでもない。

ソ連での戦犯裁判が後あとまで禍いして、米占領軍は私の公職復帰を許してくれなかったのには憤慨したが、石川県庁には「囑託」ということで勤めさせてもらった。時々、持病には悩まされるが、身障者ながら九十三歳の今日まで生きてきたことを幸せに思っている。あの不毛の地フェルガナ盆地が、今日、大オアシ

ス地帯になり、綿花、ブドウ、クワなどの豊作地になったと聞いて感慨無量である。

思い出の数々

熊本県 安田 剛

私が終戦を迎えたのは、満州奉天飛行場近くで、当時、陸軍の最新鋭機「百式司令部偵察機」の整備を担当するため、八野航第二独立整備隊として展開中のときでした。

何日かたつて飛行場にソ連機が飛来、私たちの部隊は武装解除。その後隊員の不安がつつり、五名ほどは南下を決意して徒歩で隊を離れた。彼らのその後の行動は不明です。

残りの者は周辺の部隊と一緒に奉天競馬場―铁路学院に集結させられる。そこには一般の人たちの姿も多数見かけることがあった。

そこで列車に乗るための編制が行われたが、私は工

業学校の建築科卒のため、軍の建築課の軍属の方と同じ小隊に入れられ、作業第二八大隊に編入される。それで、同じ隊の者とは別になる。

私たちは、九月中ごろ、奉天出発―ハルビン經由でソ満国境の黒河に十月初めに着く。そこからソ連領に渡り、貨車に乗せられ、長い苦しい旅が始まりました。そして、旅の終着点は中央アジア・ウズベク共和国のタシケント、昭和二十年十月の末でした。

タシケントの収容所前に並んだとき、あの入り口の門の重い扉、そして、周囲に張られた鉄条網、四隅の望楼を見たとき、いよいよつらい地獄の生活が始まるのかと思つたとき、不安が胸いつばいに広がり、いつしか目に涙したのを今でもはつきりと思ひ出すことができます。

収容所での作業は建設作業ということでしたが、最初に連れていかれたのが広い畑の中、何のことはないケープル埋設のための穴掘り。その日のノルマを示されたので、最初ではあるし、みんなが助け合いながら、ほとんど目標どおり頑張つて安心していたら、翌日は